

さよならの儀式

目次

母の法律

7

戦闘員

69

わたしとワタシ

121

さよならの儀式

143

保安官の明日あす

341

海神かいじんの裔すえ

319

聖痕

233

星に願いを

181

装画——みっちえ（亡霊工房）
装幀——川名潤

さよならの儀式

母の法律

咲子^{しげゆき}ママが死んだとき、わたしは泣かなかった。三カ月前、主治医の先生から、これ以上治療を続けてもママを苦しめるだけで意味がない——という説明を受けて、憲一^{けんいち}パパがサイトマクロシン投与^やを止めると決めたとき、一美^{かずみ}と二人で一晩中泣き明かして、覚悟ができていたから。

ママが人生の終わりの約八十日間を過ごしたホスピスの〈コスモス〉は、外見は昭和レトロなレンガ造りの洋館だけど、内部には最新式の設備が整えられていて、スタッフの人たちもみんな優秀だった。ママは最期^{さいご}まで心穏やかに過ごせたと思う。全ての個室から見渡せる庭には季節の花が溢れ^{あふ}、朝夕には水盤に様々な種類の野鳥が水浴びにやってくる。運がいいと野生のリスの可愛らしい姿^{かawaii}を見かけることもあった。

ママのいたフロアの主任さんがお通夜に来てくれて、思い出話^{おもいでわ}をしているとき、ヘコスモス^{ヘコスモス}は花の名前ではなく、〈宇宙〉の方の意味なのだ^だと教わった。死出の旅立ちを目前にした入居者と、それを見守る人びとが形成する小宇宙だ。

「咲子さんは、わたしどもの宇宙を横切っていったとびきり美しい彗星^{すいせい}でした」

わたしもそう思う。咲子ママは美しかった。容姿だけでなく、心も。

咲子ママの娘になったとき、わたしは四歳七ヵ月。ママは三十四歳だった。憲一パパと結婚して十年目、九歳十ヵ月の翔と五歳半かけるの一美の四人家族のところ、わたしが加わったのだ。パパとママはクラス・ファーストの養父母認定を得ていて、新生児でも引き受けられる資格があったのに、マッチング・リストでは下位に置かれていたわたしを引き取ってくれた。

「あなたの顔を見て声を聞いたなら、他の子供のことは考えられなくなっちゃったの」

憲一パパの話によると、翔のときも一美のときも、ママのそういう「ひと目惚れぼ」で決まったのだそう。

「ママの目に間違いはないから、パパは安心して任せっきりだったよ。それで正解だったろ？」

パパの言うとおりの。わたしが加わってから十二年、わたしたちはいい家族だった。どうしようもないことだとわかっていても、咲子ママを失って解体されてゆくことが悲しい。養父母が離婚した場合、または死別によってどちらかが単身者になった場合は、未成年の養子をヘグランドホームヘグランドホームに戻す。これは「被虐待児の保護と育成にかかわる特別措置法」——通称「マザー法」で定められた基本的な手続きだ。わたしが生まれる二十年以上前、この法律が施行された当初は、離婚や死別によって片親になっても、当事者の希望とマザーシステム管理運営委員会の承認があれば、その養家庭はそのまま認められていたの

だそうだけど、いくつかのスクランダラスな事件が起こった結果、その「温情」はナシになっちゃった。

生前、咲子ママは委員会のそうした融通のきかなさに批判的で、片親養家庭解体のきつかけとなった事件のなかには、冤罪えんざいやでっちあげが混じっていると怒っていた。

「あれほど嚴重な心理テストをパスして、長期間の教育を受けた養父母が、パートナーを失った途端に養子を性的に虐待し始めるなんてあり得ないわよ」

政府もマザー委員会も、もっと養父母を信用するべきだし、自分たちのシステムに自信を持つべきだと、憲一パパを相手に、ママにしては珍しく演説していたことがある。深夜、二人でワインを飲んでるときだったから、ちょっぴり酔っていたのかもしれない。

ママの義憤（公憤？）に、憲一パパは苦笑していた。

「まったく君の言うとおりでと思うよ。だけど、世間の多くの人たちはそうじゃない。委員会が片親養家庭解体の原則を徹底しているのは、虐待の発生を防ぐためじゃなく、世間の根強い偏見から僕たち養父母を守るためだと考えた方がいいんじゃないかな」

パパとママはとつてもイケてる夫婦だったから、差し向かいでワイングラスを傾けている姿は絵になった。こっそり夜更かしをしていて、その様子を垣間見たわたしは、二人のことが自慢で誇らしかった。

あれからたった四年後、ママに再発が見つかった。ママに取り憑いた悪性新生物は、若いころのママから子宮を奪っただけでは足りずに、しぶとく鎌首かみづぶをもたげたのだ。そして

とうとうママを打ち負かし、わたしたちを引き裂こうとしている。

マザー法は、この国にいる全ての被虐待児を救済し得る奇跡のシステムだ。サイトマクロシンもまた、その発生のメカニズムが解明されている悪性新生物のほぼ全てに効き目のある奇跡の分子標的薬だと言われている。でも、そのどちらにも限界はある。

今はまだ。わたしはそう思いたい。

ママの葬儀を終えて、一カ月の猶予期間が満ちる前に、一美とわたしは手荷物をまとめ、地元のレストランホームに移った。憲一パパとわたしたち自身の希望で、名字は憲一パパと同じまま、社会的な籍はマザー委員会のもとに戻ったのだ。

一美は十七歳、わたし二葉は十六歳。年子の姉妹だけれど、マザー委員会が養家庭のない養子に提供する生活拠点であるグランドホームでは、十三歳以上は個室住まいになる。ここのグランドホームは周辺の複数の自治体が合同で切り盛りしていて、収容児童数が多い（グランドホームでは、職を得て自立するまではいくつになっても児童扱いされるのが地味にイラつく）。建物は古い公営住宅を改築したもので、利便性もセキュリティも高いけれど、天井が低いのが玉に瑕だ。内装や家具がお洒落でも、それだけで一抹の古くさが漂ってしまう。

長男の翔はもう成人しているし、うちから遠く離れて大学の寮に入っている。わざわざ休日をつぶして、わたしたちの新しい住まいまで片付けの手伝いに来てくれた。

「荷物なんか大してないのに」

「でも、心配だからさ」

お兄さんはお母さん似ね。妹さんたちはお父さんに似てるわね。わたしたちがマザー法の傘のもとにいる養家庭だと知らないうちは、まわりの人たちはしょっちゅうこんなふう
に言った。だけど、大人になった翔は、むしろ憲一パパに似ている。顔かたちではなく、
動作やちよつとしたクセ、言葉の言い回しがそっくりなのだ。

一美とわたしは、パパにもママにも似ていない。翔とも似ていないし、お互いに似てい
るわけでもない。でもちゃんと親子に、兄妹に、姉妹に見えるらしい。やっぱり顔かたち
ではなく、雰囲気や仕草が似通っているのだという。

折り合いながら、助け合いながら、互いを思いやりながら暮らすことが、人と人とを似
通わせる。よく育てられた子供は、よく育ててくれた親から様々なものを吸収して、その
結果として自然に似てゆくのだ。だからその親子のあいだに血縁があるかどうかというこ
とには、実はあんまり——いえ、ほとんど左右されない。

翔が、ちよつと寂しそうな目をして言う。

「僕たちはずつと兄姉妹きょうだいだからね」

「もちろんよ」と、わたしは応じる。

一美とわたしは、就労したら二人で部屋を借りて、翔と憲一パパと行き来するつもりだ。
グランドホームにいれば、自活できるようになるまで生活の不安はない。学費は国家が負

担してくれる。いわゆる「お小遣い」もちゃんと支給されるけれど、一美は高校生になっただけでアルバイトを始めたし、わたしもこれからはそうするつもりだ。ことアルバイトについては、どこでどんな仕事をするか説明し、許可を得る対象が、養父母からグラントホームの担当者に代わっただけのことだから。

「ねえ、翔」

アンティークショップで少しづつ買い集めた昔のレコードやCDを片付けながら、こちらには背を向けたまま、一美が声をかける。

「あのカノジョとはどうなってるの？」

瞬間、翔の瞳が翳った。わたしはそれに気づかないふりをして、衣類を抱えて立ち上がった。

「別れたよ」と、翔は言った。

そう、と一美は言った。翔からは見えないだろうけれど、わたしには見えた。一美がほんのり微笑んで、その笑みをすぐに消すのを。

咲子ママが〈ヘコスモス〉に移る手続きをしているとき、お見舞いにガールフレンドを連れていって紹介したいと、パパに相談があった。きつとママが喜ぶだろうとパパも乗り気だったのだけれど、結局ガールフレンドがお見舞いに来ることはなかった。

そのころは付き合い始めて半年ぐらいで、翔は、うちがマザー法の養家庭であることを、ガールフレンドに言っただけでなかった。半年じゃ、まだそんなに不自然なことではないと思う。

むしろ、早いうちからやたらと自分の家庭のことをしゃべる方がおかしいというのがわたしの感覚だ。

でも、翔のガールフレンドは違ったらしい。ママが元気なうちに紹介しようということになって、初めて翔がうちの事情を打ち明けると、彼女は「騙だまされていた」と怒りだした。親まで出てきて大騒ぎ。それでわかったのだが、ガールフレンドの両親は、マザー法への反対運動に関わっていたのだ。むしろ翔の方が騙だまされていたんじゃないかと、わたしはホントに腹立たしかった。

「彼女のことでは、一美にも二葉にも嫌な思いをさせちゃったよね。ごめん」
「そんなことないよ」

わたしは言ったけれど、一美は黙っていた。レコードとCDを気に入るように並べ終えると、振り返ってニコツとした。

「おなかすいちちゃった。ランチにしない？」

ランチのあとは三人で買い物に行き（翔はお小遣いでわたしたちにTシャツを買ってくれた）、翔を駅まで送った。ブランドホームへ戻る道々、新緑の街路樹の下を歩きながら、一美は、ついさっきまで話していたことの続きのように、言った。

「——嫌らしいって言われたの」

わたしは驚いて足を止めた。一美も立ち止まり、わたしに顔を向けた。

「翔のカノジョと母親が、あたしのバイト先に押しかけてきて」

「いつ？ そのこと、パパに言った？」

一美はかかったるそうに肩をすくめた。

「その場で撃退できたから、いいのよ。店長が味方してくれたの」

一美は週に何日か、放課後の数時間、カフェでアルバイトをしている。書店のなかにある店なので、本好きの一美にはびったりの仕事だ。女性店長にはわたしも会ったことがある。二児のママの素敵な女性だ。

「一美の何が嫌らしいって言ってきたの？」

「初潮が来てからも、血のつながらないパパと翔とひとつ屋根の下に暮らしてきたこと」
言って、一美は笑った。

「お店のなかにズカズカ入り込んで、大声で喚わめいたのよ。ショチョウって。そっちの方がよっぽどはしたないわよね」

一美がびっくりして固まっていると、店長が、マザーの養家庭だというだけでそんな目を向けるのは、あなた方の意識のなかにそういう考えがあるからであって、嫌らしいのはあなたの方ですよって、懇切丁寧に言い返してくれたんだって。

「店長の慇懃無礼いんぎんぶれいって素敵なの」

「あたしもその場にいたかったなあ。言ってやりたいことがいっぱいある」

正しい反撃を受けた翔の元カノ母娘おやこの顔も見えてやりたかった。

だけど、一美は首を振る。

「二葉はいなくてよかった。だって、あたしやっぱりショックだったもの。あいつらがどうしてあたしのバイト先を知ってるのかなって。翔が言うはずないもん」

確かにそうなのだ。マザー法には根強い反対者がいて、反対運動をしているグループのなかには過激派もいる。だからわたしたち養家庭は、リアルでもネットでも、人付き合いと個人情報取り扱いには慎重だ。

「そのあととは？　ほかには嫌がらせとかされてない？」

「大丈夫。でも店長が、しばらくはキッチンで働いた方がいいって。おかげでホットサンドを上手に作れるようになったから、そのうち作ってあげる」

ブランドホームにはカフェテリアがあり、基本的に三食すべて賄^{まかな}われているけれど、自炊したい場合はそう申請すればいい。わたしたちは、週末は自炊できるようにしたいと相談しているところだった。

「へんなこと聞かせちゃってごめん。帰ろ」

笑みを取り戻し、長い黒髪を肩先からちよつと撥^はねのけて、一美は歩き出した。

一美は美人だ。憲一パパは「古い言い回しだけど、一美には明眸皓齒^{めいぼうこうし}という表現がびつたりだな」と言っていた。咲子ママはチャームミング系で、一美はビューティフル系だと評したこともある。

その義妹のわたしは、まるでビューティフルではない。髪も、腕が痛くなるほどブラッシングしても、一美の黒髪みたいに鏡のように輝いてはくれない。だからずっとショート

カットで通している。そんなわたしたちなのに、まわりからはちゃんと姉妹と認識されるのが不思議だけど、それこそがマザーの魔法だ。科学と医学に裏付けられた、二一世紀の魔法なのだ。

マザー法の養家庭を形成するとき、委員会は養父母と養子との容姿のバランスにナイーブな注意を払う。養父母が「ぜんぜん似ていない方がいい」と希望する場合（あるのだ、そういうケースが）以外は、養子は養父母と外見的特徴がいくつか重なっているのが望ましいとされる。但し、委員会が重要視するのは目鼻立ちではなく、骨格や筋肉の付き方、頭蓋骨と顎の形だ。

マザー法の法案が国会を通過したときから、養家庭構成マッチング用のヒト遺伝子解析技術はめざましく進歩した。その一方で、とうの昔に疑似科学として忘れ去られていた骨相学が復活し、3Dモデリングを活用した新骨相学として注目されるようになった。これは、マザー法のもとで養家庭構成のシミュレーション実験を行っていた児童心理学・教育心理学・認知心理学チームの研究成果のおかげだ。

頭蓋骨と下顎骨の形状が似ていると、声が似る。声が似ていると、容姿は似ていなくても、人は「似ている」と感じる。また、人が誰かを「似ている」と感じるときには、顔かたちよりも全身の骨格——いわゆる体格に注目している。目鼻立ちがそっくりでも体格や声が変わると、あまり「似ている」と思わない。

そして重要なのは、人が誰かを「自分と似ている」と感じる時、その感覚の根底には

相反する二つの心理が潜在しているということだ。「似ている」から「親しむ」。「似ている」から「警戒する」。この二つ。

「似ているから親しみを覚える」のは、社会的な動物であるヒトにとって、まず「同族だ」と感じるのだが、同じ社会の構成メンバーになるための大きな判断基準であるからだ。「似ているから警戒する」のは、そこから一歩先に進んで、「同じ社会のなかに自分と似た個体がいいたら、自分がその社会から受けるべき利益や、与えられるべき役割を争うことになり得る」からだ。社会が大きくなり、より多くの個体に利益を与え、より多くの個体に役割分担を振ることができるようになれば、この争いは緩和され、似通っている個体同士が協力し合うようになれて、さらに社会が大きくなってゆく。

成長期の子供は、こわお声や体格が自分の保護者と（部分的にでも）似ているところのある教育者についての方が、そうでない場合よりもストレスが少なく、より安定した心理状態で効率的に学ぶことができる。しかし、一人の教育者のもとに、容姿・体格・声に似通ったところのある子供たちを全体の人数の四五パーセント以上集めてしまうと、子供たちのあいだで緊張感が高まる傾向がある。似通ったところのある子供たちが、「自分向け」の利益と役割分担を争ってしまうからだ。

マザー法の管轄下かんかつかの養家庭は、この心理メカニズムを充分に勘案して構成される。養父母と養子は、目鼻立ちという表層的なことではない要素が「似ている」のが望ましく、養子同士は「似すぎない」のが望ましい。さらに理想的なのは、そうやって組み合わせられた

養子の兄弟姉妹が、生活を共にしてゆくことで「生まれながらにそうであるように」似ている感じに育ってゆくことだ。

わたしたち一家は、その理想型のほとんど完璧な体現者だった。マザーの魔法に護^{まも}られて、幸せだった五人家族。咲子ママの死でちりぢりになってゆくのは、星が砕け散^{まも}ってしまふのと同じだ。

グラントホームに移って半月後、手頃なアルバイト先を決めるよりも先に、わたしは担当者と呼ばれた。地区委員会との面談の日程を決めたい、という。

「まだお母さんが亡くなったばかりなのに、ごめんなさいね」

一美とわたしの担当者は、わたしたちから見たら祖母にあたる年代の女性だ。いつも丁寧で優しい。

「かまいません。母の納骨も無事に済みましたし、一美もわたしも、この先どうしたいか決めていきますから」

マザー法で保護される養子には、十六歳が大きな節目になる。十五歳までは、一方的に保護されるだけで、本人の意思は参考程度だけれど、十六歳以上になると、決定権の一票を持たせてもらえるからだ。マザー委員会の委員の一票、オブザーバーの児童心理学者の一票、マザー委員会を監視するオンブズマンの一票、そして養子本人の一票。

こぢんまりと居心地のいい面談室で、カフェテリアから取り寄せたハーブティーのカッ

プを挟み、わたしは担当者と同じ合った。担当者の前には、マザー委員会仕様のタブレットと、真新しい紙のファイルが置いてある。養家庭、養父母、養子に関する情報は全て委員会のデータベースに収められているのに、個人面談のときだけ取り出されるこのような紙のファイルは、前世紀の遺物であるというより、むしろ感傷的な小道具だ。

「どうしたいと決めているのかしら」

「もう養家庭をマッチングしてもらう必要はありません」と、わたしは言った。「一美も、このままグランドホームから大学を受験して、合格したところに進むと言ってるはずですけど」

担当者は軽くうなずくだけだ。グランドホームに戻ったわたしたちは一個人として処遇されるので、プライバシーは厳密に守られる。この担当者は一美とも既に面談しているかもしれないけれど、彼女がどんな考えを持っていて、何を言っているか、明かすことはない。逆も同じだ。それを承知の上で、つい一美を引き合いに出しながら自分のことをしゃべってしまうわたしは、依存傾向の強い妹なんだろう。

「わたしもそのつもりです。ここのグランドホームの暮らしが、一美より一年長くなるだけですから……って、浪人しなければの話だけだ」

担当者はにっこりした。笑い皺じわが深い。

「成績優秀だから、大丈夫でしょう。一美さんとは、大学や専攻学科の具体的な話までしてる？」

「方向性が違うので、お互いにあんまり参考にならないんです」

一美は幼児教育と発達心理学を学び、小学校の教師か、マザー委員会の幼児部門のケースワーカーになりたいと言っている。マザー法に命を救われ、人生を獲得し直してもらった養子には、将来は委員会のスタッフになりたいという希望を抱く者が多い。それは純粹な恩返しだし、社会に貢献することにもなるから。

わたしは違う。大人になったら、自分の生まれやマザー委員会のことを忘れて、好きな道に進みたい。咲子ママが余命宣告を受けるまでは、わたしの将来の夢なんかまるっきり漠然としていたのだけれど、今は決まっている。西洋美術史を学んで、その道の専門家になりたい。学者になるのも、美術館のキュレーターになるのも、どちらも狭き門だけれど、必ずやりとげてみせる。だって、それが咲子ママの若いころの夢だったから。

「それに、一美は大学では寮生活をしたいみたいです。わたしは進学先の地元のグラウンドホームで充分だけど」

「なるほどね。今後の具体的な相談は、あなたとうちの教育関係のアドバイザーと、高校の進路指導室とで話し合って進めていくことになります」

担当者は柔らかな笑みを浮かべたまま、指先でタブレットに軽くタッチした。

「あなたの養父母は、クラス・ファーストのなかでも最優秀のカップルでした」

「ありがとう」

ごく自然にそう言って、わたしは急に泣きそうになり、軽く目をつぶって堪えた。

「素敵なパパとママでしたから」

タブレットから目を上げて、担当者はわたしを見た。

「あなたが新しい養家庭を希望せず、グランドホームに親権を託したいと希望するなら、手続きは簡単です。養父だった田坂憲一氏や、義兄の翔さん、義姉の一美さんとの交流も、あなたの意思で自由にかまいません。ただ、面倒くさいでしょうけれど、グランドホームにいる以上、月に一度の面談には付き合ってくださいね」

「わかりました」

「あなた方には、記憶沈殿化の揺らぎの発現もありませんね。これは医療記録の不備ではないわよね？」

相手によってはきわどい冗談なのに、担当者の目は笑っている。

「わたしたち、心身共に健康そのものの子供たちでした。パパとママのおかげです」

「最近はどうですか。変化はない？ 不安を感じたり、悪夢を見ることはありませんか」

「今のところありません。咲子ママの夢を見て泣いちゃうことはあるけど、それは怖い夢じゃなくって、幸せだったときのことを思い出してるだけだから」

記憶沈殿化は、マザー法の傘のもとに入る子供たちが受ける基本的な治療だ。その子の虐待の経験を記憶から消し去るのではなく、記憶の底深くに沈殿させ、二度と蘇らないようにする。

犯罪や事故、災害などで衝撃的心傷を負った大人や子供にも、短期記憶の沈殿化措置は

しばしば行われる。ただ、マザー法に守られる子供たち——健全な養父母とのマッチングが行われる養子候補の子供たちの場合、虐待の記憶の沈殿化は、必然的に、その虐待的行爲を行った人物つまり実父母や血縁者、その配偶者等の記憶も共に沈殿化させることになる点が、一般的な治療措置とは大きく異なっている。

ざっくり言うなら、わたしは実父母と、それにまつわる記憶の一切を忘れている。思い出すきっかけもない。それはわたしの記憶の座のもっとも深いところに沈んでいるはずだ。翔はこれを「湖の底に沈んだガラスの破片」と表していた。透明なガラス片だから、どこに沈んでいるのか見えない。ただ、素手で取り出そうとしたら、すごく高い確率で血を流す羽目になる。

担当者の言う「揺らぎ」の発現とは、この沈殿化が何かのきっかけで不安定になり、当該の記憶が不随意に蘇ってきて——ガラスの破片が水中をふらふら漂って心を傷つけ、当人にパニック障害のような症状を起こさせることだ。

そんな経験、わたしには一度もない。知っている限りでは、翔にもない。一美だけは、わたしが憲一パパと咲子ママの養家庭の一員になったばかりのころ、軽度なものが何度かあったらしい。それはたぶん、パパとママの注意が新参者のわたしに（一時的にしろ）集中したので、一歳しか違わない一美がちょっぴり心を乱してしまったせいだろう。

マザー法の保護のもとで記憶沈殿化措置を受けた養子たちの第一世代は、既に自分たちが親になる年代だ。みんな健全な社会生活を送っている。成人して一市民になってしまえ

ば、〈マザーの子〉であると公的に明らかにされることは一切ない。沈殿化が彼らの人生にマイナスになった事例は、ひとつも報告されていない。これは何かとうるさいオンブズマン組織も認めている。マザー法に反対する活動家たちが喧伝する悲劇的な失敗例は、調べてみると裏付けがなく、捏造ばかりだ。都市伝説みたいなものに過ぎない。

わたしは今この瞬間も、未来のいつでも、自分がマザーの子であると胸を張って言える。マザー法に救済され、憲一パパと咲子ママに巡り逢えたからこそ、幸せだったときのことを思い出して涙ぐんでしまう、ごく普通の十六歳の女の子になれたのだから。

「わかりました。では手続きに入ります。新しい身分証が発行されたら、すぐ届けますからね」

面談室を出て、廊下を歩きながらスマートフォンを取り出すと、一美からいくつもメッセージが来ていた。動画もついている。何事かと思ったら、

〈今朝、ラテが赤ちゃんを生んだよ！〉

〈ちょっと見えにくいかな。四匹いるの〉

〈今はラテを刺激しちゃいけないけど、一週間ぐらいたら抱っこできるかも〉

ラテというのは、一美の親友の三好さんが飼っている猫の名前だ。淡い茶色とクリーム色の混じった毛色がカフェラテみたいだから、ラテ。近ごろでは逆に珍しい和猫の雑種で、一美いわく「こんなに賢くて性格のいい猫はいない」。

そういえば、咲子ママの病室で、ラテのお見合いがどうかこうとか話していたことが

あったっけ。ラテの子猫ならほしいという人も、パパ候補もいっぱいいるとか。

憲一パパに動物の毛のアレルギーがあったから、うちでは熱帯魚しか飼ったことがない。一美は犬も猫も大好きで、しょっちゅうラテに会いに遊びに行っていた。

動画を見ると、タオルと毛布を敷き詰めたケージのなかで、ラテが子猫たちにおっぱいをやっている。子猫たちは、まだ毛が薄くて「猫」に見えない。ラテがその小さすぎる身体からだを舐めてなやっている。

さっき面談室では堪え切れたのに、今度はダメだった。わたしはスマートフォン画面にぼたりぼたりと涙を落とした。

わたしのママは、もういない。

——こんにちは、二葉ちゃん。

グランドホームで初めて顔を合わせたときの笑顔。柔らかな手の感触。

——今日から、この家でみんな一緒に暮らすの。ここが二葉の部屋よ。

パパとママの家に移った日の夕食は、わたしの好きなマカロニグラタンだった。今も大好物だ。〈コスモス〉に移る前にその思い出話をするよ、咲子ママはレシピを書いてくれた。

——ごめんね。もう一緒にキッチンに入って教えてあげられなくて。

こんなにも悲しくて、胸が張り裂けそうだけれど、わたしはママの記憶を失わない。ずっとずっと、永遠に大切に保ってゆく。

生後一週間ほどでは、子猫たちは依然として「猫」に見えなくて、わたしにはまだまだ抱っこなんて無理。一美は一人で三好家に日参し、写真や動画を送ってきた。

三好さんのご両親は輸入家具とファブリックの専門店を経営している。富裕層御用達の贅沢ぜいたくなお店も素敵だけれど、映画のセットみたいな（何かのドラマのロケに使われたことがあるそうだ）自宅もまた素晴らしい。憲一パパも咲子ママも、インテリアやファブリックにはあまり関心がなく、「居心地がよくて清潔ならばそれでよし派」だったから、ことその点については、三好家はわたしの憧れの対象だった。

仕事柄、三好さんのご両親は顔も広い。子猫たちの里親も、わざわざ探すまでもなく、その交友範囲から決まりそうだという。子猫たちのためには幸いなことだけど、一美は寂しそうだっただ。

「いつか部屋を借りたら、犬か猫を飼ってもいい？」

「いいけど、世話は一美がしてね。わたし、生きものはちょっと辛い」

だって、病気や怪我けがが怖い。死んでしまうことが怖い。愛いとしいものを失うことを想像するだけで、もう耐えられない。

「もちろん、あたしが責任持って面倒みます。でも、二葉もペットと一緒に暮らすようになつたら夢中になっちゃうタイプだよ」

「なんでわかるの？」

「あんたのこと、咲子ママの次によくわかってるもの、あたしは」

その言葉はわたしも一美にお返ししたい。

「子猫ラブはいいけど、一美さん、自分が受験生だっことをお忘れなく」

一美はいわゆる地頭がいい人なので、中学でも高校でも、そんなに勉強しなくても、いい成績をキープしてきた。だけど、大学受験となるとそうはいかないだろう。

「大丈夫よ。もう夏期特別講習のスケジュールは全部決めてあるから」

「ってことは、〈夏期〉までは受験生モードにならないって意味？」

「いいじゃない。二葉って堅苦しいねえ」

「あら、それはわかってなかったのかしら、お姉様」

結局、一美の子猫たち訪問はやまず、生後一ヵ月を過ぎたところで、

「もたもたしてると、一度も会えないうちに里親さんのところへ行っちゃうよ！」

と説き伏せられ、土曜日の午後、わたしも一緒に三好家を訪ねることになった。グランドホームから環状モノレールに乗って二十分ほどのところにある高級住宅街で、内部に入るには警備員のいるゲートを通らなくてはならないから、三好さんが迎えに来てくれた。

三好さんはぼっちゃりしていて、美人ではないけれど、雰囲気優しい。一美とは対照的なタイプだから、うまが合うのだろう。

「二葉ちゃん、元氣そうでよかった」

こんにはの挨拶もそこそこに、三好さんはわたしの手を取ってそう言った。お母さん

と二人で咲子ママの告別式に来てくれて、わたしと会うのはそのとき以来だ。顔が腫れるほど泣き濡れていた一美より、乾いた目をして機械みたいにてきぱき動いていたわたしのことが、すごく心配だったんだって。

「ありがとう。今はすっかり落ち着いています。グラントホームのご飯はカロリーが高くて、ちょっと太っちゃった」

一美もわたしも、自分たちがマザーの子であることを、極力まわりに知らせないようにして生きてきた。「知られない」ではなく、「知らせない」だ。隠しているわけではなく、積極的には口にしない。ごく少数の心を許せる人びとに、必要な場合だけ打ち明ける。

今さら、偏見や好奇の眼差しが恐ろしいわけではない。社会の大勢はマザー法を支持している。でも、反対派がどこに潜んでいるかわからないから、用心するに越したことはないのだ。

一美も、三好さんとは中学一年生からの仲良しだけど、わたしたちがマザーの養家庭の養子であることを打ち明けたのは、咲子ママが余命宣告を受けたときだった。ママが亡くなれば、わたしたちは憲一パパと離れてグラントホームに入ることになるので、話しておいた方がいいと思ったのだという。

そのとき三好さんは、わたしたちがマザーの子であることより、咲子ママの死によってわたしたちの家庭が解体されてしまうことの方に驚き、すごく慰めてくれた。ご両親からも、わたしたちみたいな悲しい別離を防ぐために、マザー法にはまだ改正の余地があるん

じゃないかという言葉をもらって、わたしはいっそう三好家の人びとが好きになった。

花壇に彩られた舗道をたどり、様々なデザインの豪邸の前を通り過ぎながら、三人でおしゃべりを楽しんだ。子猫たちは里親さんに命名してもらう方がいいので、まだ番号で呼んでいるのだという。

「え？ 一番、二番とか？」

「ううん。イチニャン、ニニャン、サンニャン、ヨニャン」

三好家のシャレー風の屋根が見えてきた。ペットがいるからヴァーチャル暖炉なので、煙突はサンタクロス用なんだそうだ。

「ちょうど今、里親希望のご家族が一組来てるんだ」

あの車がそうよ——と、車寄せに駐められているダークブルーのランドクルーザーを指さした。

「わ、ごっついクルマ」

三好邸だけでなく、この住宅街の雰囲気にも釣り合っていない。

「アウトドア好きの一家なのかな？」

「全然そんな感じじゃないよ。旦那さんは投資コンサルタントだっていうし」

ご夫婦とも三十代半ばで、子供は小学生の男の子。すっごいお金持ち。

「ミヨシに金持ちと言われるんだから、そりゃ桁違いなわけよ」と一美が言う。

「うちのお店のお得意様なんだって。だから断るわけにもいかなかった」

三好さんは軽く口を尖^{とが}らせる。

「お母さんは、お父さんがお店で子猫のことをしゃべるからだって怒ってるのよ」

わたしは言った。「じゃあ、三好さんのお母さんは、その一家にニャンたちをあげたくないんですね？」

「たちどころか、一匹も」と、三好さんはうなずく。「何となく気が進まないって。何となくとは何だって、お父さんもむくれるんで困っちゃう」

「あら、母親の〈何となく〉は重大よ。聞き捨てしちゃいけないよ」

わたしは一美の顔を見た。「もしかして、何とかしようとか思っていない？」

一美はわざとらしく肩をすくめて、

「ミヨシ、あたしの妹のこの誘導尋問をどう思う？」

「当たってると思う」と言って、三好さんはクスクス笑った。「まあ、その話はニャンたちに来てからしようね」

やりとりしながら三好家の前庭を横切り、玄関からホール、すっかり夏仕様に模様替えされているリビングを通り抜けて、中庭へと向かう。ラテは屋内飼いだけど、中庭には専用のハウスとケージがあり、子猫たちもそこにいるのだ。

幅の広いフランス窓越しに、リビングのなかからも中庭の様子がよく見えた。ラテにそっくりの毛並みの子猫を抱いて、長身の男の人が立っている。中庭はテラコッタ敷きで、円形の植え込みには猫が食べてしまっても害のない草木だけが配されている。景色として

はシンプルだ。ジーンズに派手なストライプのシャツ、あのランドクルーザーと同じぐらいごっつい腕時計をはめたその男性の姿は、何かのグラビアから切って貼りつけたように見えた。

男性の傍らに、同じくらいの年齢の女性が寄り添っている。つまり、この人たちが子猫の里親希望の夫婦なのだろう。シャツはペアルックで、女性の穿^はいている白いスカートは、今年流行のアシンメトリーなデザインだ。彼女が手を上げて夫の腕のなかの子猫を撫^なでると、腕時計もペアだとわかった。

「ほらジャンプ！ こっちこいよ〜」

ラテと子猫たちのいるケージの前にしゃがみこみ、十歳ぐらいの男の子がはしゃいだ声をあげている。右手をケージのなかに差し入れて、子猫を撫でているか、じゃらしているらしい。この子のシャツも両親とおそろいだ。絵に描いたように満ち足りて幸せな家庭。

男の子のそばには、三好さんのお母さんが付き添っていた。わたしたちの顔を見ると、
「あら、一美ちゃん二葉ちゃん」

自分がケージのそばから離れるついでに、さりげなく男の子の肩に手をかけて立ち上げさせた。男の子はリボンのようなものを握ってぶらぶらさせている。こっちを向くと、きかん気そうな顔が見えた。目が輝き、小鼻が広がっていて、子猫との遊びに興奮しきっている様子だ。

「アンザイさん、すみません。次の方がいらっしやいましたので、今日はこのへんで」

三好さんのお母さんが、あの夫婦に声をかけた。ラテそっくりの毛並みの子猫は妻の方の手に移っていた。抱っこがイヤなのか、いじいじ動いている。夫の方は腕時計を見て、「ああ、時間ですね」

その声にかぶさるように、男の子が「ママあゝ！」と叫んで地団駄を踏み始めた。「もっと子猫と遊びたい！ 帰るのヤダ！」

それから五分ばかり、わたしたちは絵に描いたような幸せな家庭の小芝居を見物する羽目になった。諭す父親、宥める母親、ますます騒ぐ子供。叱る父親、あやす母親、ひっくり返って泣き叫ぶ子供。子供を引っ張り起こして抱き上げる父親、その頭を撫でくりまわす母親、盛大にしゃくりあげる子供。

わたしは、一家の靴もおそろいのブランドものだということに気がついた。ふうん……と思いつつ眺めていると、母親と目が合った。彼女もわたしを観察していたらしく、一瞬、チカッと音がしたみたいに視線がぶつかった。

ヘンな感じ。お互い初対面のはずだけど、今、何か問いかけられたような気がした。

三好さんのお母さんの先導で彼らが中庭から立ち去ると、わたしたちは一斉に息を吐き出した。

「なあに、あの悪ガキ」

ラテにそっくりな毛並みの子猫はニヤン。あの夫婦がほしがっている子だという。一美が抱き取って、そうっとラテのそばに戻してやった。

「この前、初めて見に来たときからああだったの」

あの男の子は乱暴で、子猫たちの尻尾を引っ張ったり、首をつかんで放り投げようとしてたりするので、ヒヤヒヤしたそうさだ。

「子猫を子供の玩具おもちゃにする気なのね」

ケージのなかに手を差し伸べ、

「ラテ元気？ ストレス溜まってない？」

ラテの顎の下を撫でながら、一美が話しかける。ラテはおとなしく首を伸ばし、喉を鳴らしているようだ。

「ミヨシ、やっぱりニニヤンは憲一パパに引き取らせてほしい。あの小僧がいる家には渡さないで」

わたしはびっくりした。「やっぱり」ってことは、前から相談してたんだろう。わたしが目を向けると、三好さんはうなずいた。

「そういうことなんだけど、二葉ちゃんはどう？」

「気持ちわかるけど、一美、今のパパは一人暮らしだよ」と、わたしは言った。「パパが仕事してるあいだ、ニニヤンの世話をする人はいない——」

「大丈夫よ。パパのパパとママがいるから」

全体はクリーム色で、耳と尻尾の先だけが茶色い子猫を抱き上げて、一美はわたしを振り返った。

「あたしたちが出ていったから、パパは自分の親と同居できるようになったの」

わたしはバカみたいに突っ立って、目をパチパチさせていた。

パパの両親はとっくに亡くなってるはず。わたしはそう聞いていた。咲子ママも早くに両親を失い、一人っ子だったから親戚付き合いもないって。事実、お葬式はわたしたち家族だけで出したんだから――

「パパ、あたしたちに気を遣って、両親はもう亡くなったって言ってただけ。本当は二人ともピンピンしてる」

「パパがどうして気を遣うの？」

「憲一パパのパパとママが、翔とあたしたちを認めてなかったからよ」

淡々とした口調で、一美は説明してくれた。

憲一パパの両親は、マザー法に反対しているわけではない。むしろ、虐待を受けて人権を侵害されている子供たちを救うために必要な法律だと認めていた。でも、それが自分たちの人生に直接関わってくるには耐えられず、憲一パパと咲子ママが養父母に志願し、資格をとって翔を受け入れたときから疎遠になった。パパの両親はわたしたちの祖父母にはなりたくなかったのだ。パパがマザーの子供たちを受け入れるようになったのは、咲子ママの影響だと言って、ママと憲一パパ両親との関係は疎遠を通り越して険悪でさえあったらしい。

「険悪って……」

ショックで、わたしは目の前が暗くなった。「咲子ママは、自分が早くに両親と死別して寂しかったから、積極的にマザーの養家庭になったんだよ」

「そんなの、あたしだって知ってるわよ。でも憲一パパのパパとママの気持ちは違ったの。そういうのは仕方ないことなの」

ニニャンの小さな頭のとっぺんに鼻先をくつつけて、一美は顔を伏せた。

「二人とも、あたしたちを毛嫌いしてるわけじゃないのよ。ただ孫として受け入れることができなかっただけ。パパがニニャンを引き取ったら、いつでも自由に会いに来ていいって言ってくれてる」

もう養家庭ではなくなったから、わたしたちとは縁が切れたから、「かつて養子だった」だけの赤の他人だから、優しくしてくれるってことなのか。

いつでも会いに来ていい。

「一美、そんなふうに扱われて平気なの？」

「ごめんね、二葉ちゃん」

わたしたちの真ん中に立って、三好さんが顔を強^こばらせている。

「わたし、そこまで詳しい事情を聞いてなくて……」

「ミヨシのせいじゃない。ちゃんと話しておかなかったあたしが悪いの」

言い捨てて、一美はしゃがみこんでニニャンをケージに戻した。ラテが鳴いている。猫はまわりにいる人間たちの雰囲気の変化に敏感なのだ。

「あたしこそごめんなさい。頭を冷やさなくちゃ」と、わたしは言った。

「イヤだ、帰っちゃおうの？ お茶とケーキを用意してあるのよ」

「じゃ、通りに出て風にあたってきます」

三好さんには申し訳なかったけれど、わたしはその場を逃げだした。小走りにリビングを通り過ぎると、ティーセットを運んできた三好さんのお母さんとすれ違った。

玄関の重たいドアを押し開き、前庭に出る。車寄せからは、ごついランドクルーザーが消えていた。わたしは舗道まで走り出て、そこでいったん立ち止まり、ひとつ深呼吸した。両手が震えるので、指をきつく組み合わせて胸にあてた。

わたしたちはマザーの魔法に守られた幸せな家族だった。理想の体現だった。なのに、養子のわたしたちのために、憲一パパは自分の実の両親と距離を置かねばならなかった。

マザー法の反対派ではないが、マザーの養家庭を受け入れることはできない？ それって何よ。立派な思想だけど、その思想のせいで自分の身に火の粉が降りかかるのはごめんって？ マザーの子供たちが幸せな養家庭に恵まれるのは素晴らしいけれど、自分たちの孫と認めることはできないって？ そんなの卑怯ひきょうじゃない。

わたしは舗道を歩き出した。素敵な住宅街の景色は、もう目に入ってこない。全てが色あせて見える。

わたしが気づいてなかっただけで、この世界は美しくなかなかったの？

「——二葉さん」

後ろから声をかけられて、わたしはちょっと飛び上がった。振り返ると、そこには、さっきのあのペアルックの妻が立っていた。わたしの驚きぶりに彼女も驚いたのか、及び腰になっている。

「驚かせてしまってごめんなさい」

言って、人目のないことを確かめるようにちらりとまわりを見回し、意を決したという顔つきで、わたしに近づいてきた。

彼女一人だけだ。夫と子供はいない。さっきとは違い、肩に小さなショルダーバッグをかけている。靴と同じブランドのものだ。

「お名前は二葉さんでいいのよね」

わたしは息を呑んでしまい、すぐには声が出てこない。

「大きくなったわね」

わたしと向き合くと、彼女の目元が和らいだ。アイメイクが上手だ。

「あなたは覚えてるはずないけど、わたしはすぐわかったわ。面影がそのままのもの。本当に……そっくりそのまま」

わたしの胸の奥に、黒雲がむらむらと湧き上がってきた。嫌な予感しかしない。立ち去ろう。この人と話しちゃいけない。

そう思うのに、足が動かない。

「もう十年以上前——もっと前になるかしら。さすがに、あなたの養父母のご夫婦のお名

前は失念してしまつて。でも、あなたの新しい名前が二葉さんになったことは覚えてる。ちやうど新緑のきれいな季節だったから、びつたりない名前だと思つたわ」

動悸が激しくて、息苦しい。わたしは声を絞り出した。「どちら様でしようか」

控えめな色合いのルージュを引いたくちびるをつと噛んでから、彼女は言った。

「申し訳ないけれど、名乗りません」

視線が強い。顎を上げて傲然としている。その様子にカチンときて、わたしは気を取り直した。

「さっきはへアンザイさん」と呼ばれてましたよね？」

しまった——というような表情が、彼女の顔の上をかすめた。

「あたしの空耳だったのかしら。ともかく、どこのだなたかもわからない方とお話することはできません。失礼します」

舗道の脇に寄り、アンザイの横を通して三好家の方へ戻ろうとした。すれ違って数歩進んだところで、彼女の声が追いかけてきた。

「あなたが記憶沈殿化措置を受けたころ、わたしはマザー委員会のセントラル・クリニックでボランティアをしていたの」

うわずった早口が耳に刺さり、悔しいけれど、わたしは足を止めてしまった。振り返らずにいるために、意志の力を総動員しなければならなかった。

委員会のセントラル・クリニックは、マザーの子供たちの記憶沈殿化措置を一手に行つ

ている病院だ。

「看護のサポートスタッフとして働いて、二年目だった。児童心理学を専攻していたから、あなたの担当になった。入院中のあなたとクロスワードパズルや塗り絵をして遊んだのよ。覚えていないかしら」

身体の脇で、わたしは両手を握りしめた。

「こんなところで、このタイミングであなたを見かけるなんて、運命の導きとしか思えないわ」

声音に、自己満足の響き。

「あなたが健康そうで、幸せそうで嬉しい。一緒に来た女の子はご家族の一員かしら。カズミって呼ばれていたわね」

一美を呼び捨てにされたことに、猛然と腹が立ってきた。わたしは背筋を伸ばして振り返った。

「だから何でしょう？ 警告しておきますが、あなたが今おっしゃった立場にいた人ならば、今していることは違法行為ですよ」

マザー委員会の職員は、養家庭や養子の個人情報について、その職を退いた後も完全な守秘義務を負うのだ。厳しい罰則規定もある。

「あたしが然るべきところに訴え出たら、あなたは逮捕される可能性さえあります。さっき一緒にいたのはお子さんでしょう？ あなたが刑事罰を受けることになったら、お子さ

んは昔のあたしのようにマザー法で保護される対象になりますよ」

一語一語、顔にぶつけるように言ってやった。アンザイはちょっとひるんで、後ずさりした。洒落た革靴のヒールが舗道にあたり、固い音をたてた。

「自分の立場はよく心得ています」

口調が変わり、よそよそしく早口になった。

「でも、知らん顔でできなかったの。三十分待ってもあなたが出てこなかったら諦め^{あきら}ようと
思ってたけど、こうして会えたから」

一生懸命言い訳している。誰に？ 何に？ この人、何をしたいの？

「わたし、あれからいろいろと考え方が変わって——」

「こちらには関係のないことです」

言い捨てて、わたしはまた背中を向けた。道の向こうから、あのダークブルーのランドクルーザーがゆっくりとこちらに走ってくるのが見えた。運転席にはペアルックの夫の姿。それにしても派手なシャツだ。この距離でも一目でわかる。

「二葉さん」

車が近づいてくる。あの男の子の姿は見えない。後部座席にいるんだろうか。

「あなたの実母はカケイサユリという女性です。ひどい人生を送ってしまったて、今は死刑囚なの」

わたしは雷に打たれたような気がした。

「ぜひ面会してちょうだい。あなたにはその権利がある。実の母親に会うべきよ。会えば必ず心が通じるし、あなた自身のことがよくわかる」

アンザイがわたしに近づいてきて、肩に手を置いた。わたしがその手を払いのけると、ぶたれたみたいな顔をした。

「そんなに怒らないで」

「あなたが不躰ぶじつぱだからです」

わたしは後ずさりして、胸の前で腕を組んだ。アンザイは手をあげて額を押さえ、目をつぶった。指には凝ったネイルがほどこされている。

「——ごめんなさい」

呟つぶやいて、彼女はまたわたしを見る。

「昔は、わたしもマザー法の全てを肯定していた。鵜呑うのみにしていたの。でも今は違う。だって不自然なもの」

生みの親のことをまるっきり忘れているなんて。思い出しもしないなんて。それで気にならないなんて。

「被虐待児童に対する記憶沈殿化措置は、まやかしょ。真の解決じゃない。偽善よ。あなたにそれを理解してほしい」

勝手に興奮して、勝手に激しくかぶりを振り、身震いする。わたしはこんなにも真剣に考えているのよ、と。

「カケイサユリは、あなたのことを忘れていない。あなたに会いたがってる。あなた方は母子おやこなの。二人で向き合えば、あなたにもそれがわかるわ」

軽いつむじ風を巻き起こしながら、わたしたちのすぐ横に、あのランドクルーザーが停車した。後部座席で小さな人影が跳ね起き、「ママ〜」と甘えた声が出た。

運転席の男性がわたしを見る。威嚇いかくするような眼差しだ。

「お願い、よく考えてみて」

アンザイがわたしの耳元みみもとに囁ささやき、わたしの手のなかに何かを突っ込んできた。ぎょっとして払いのけると、その何かは足元に落ちた。名刺みたいな白いカードだ。

「わたしはもうあなたの前には現れません。だけど、実母に会う決心がついたら、そのカードが役に立つわ」

そう言い残し、彼女は助手席のドアを開けると、素早く車に乗り込んだ。ランドクルーザーはわたしを置き去りにして走り去った。

マザー法の肝きんは、かつては全面的に尊重・優遇されていた父母の子供に対する「親権」を、国家が集中管理できるよう制定したことにある。親権の停止・剝奪はくだつ・付与の全てが国家機関であるマザー委員会の決定に任せられ、それを問う申し立ては、(代理人も含めて)親子どちらの側からも自由に行うことができる。児童相談所や教育機関の責任者が、その必要を認めて申請することもできる。

国家が親権を管理するということは、子を持つ親は誰でも、いつ何時なにごときどんな理由で「養育者として不適格だ」と認定され、子供と引き離されてしまいかわからない危険性があるということだ。施行後も強硬な反対論が根強く存在し、「全体主義だ」「実質的には国家総動員法に等しい」と批判され続けているのは、少なくない人びとが、「親子」のつながりという神聖不可侵なものに国家権力が介入してくることへ本能的な嫌悪感と警戒感を抱いてしまうからだろう。

それでも、マザー法とマザー委員会の存在が社会で広く支持され尊重されるようになったのは、その活動が現実によくの不幸な親子を救済し得てきたし、今この瞬間にも救っているからだ。

そう、虐待から救われるのは子供だけではない。親もまた救い上げられる。マザー法のもとでは、子供を虐待した親であっても、一切の刑事責任を問われることはない。子供をどんな目に遭あわせても、傷害罪にも傷害致死にも、殺人未遂にも殺人罪にもならない。虐待する親に必要なのは刑事罰ではなく保護と教育だから、専門施設に収容され、六ヵ月間の教育プログラムを受ける義務を課せられるだけだ。

プログラムが終了すると社会復帰のための中間施設に移り、そこでさらに半年間過ごしながら、本人の希望と資質に添った職業訓練を受ける。男女を問わず、当該の親は虐待の発覚によって失職したり、もともと無職の場合も多いから、ここで就労の足がかりを築くのである。

親に対しては、記憶沈殿化措置がとられるかどうかはケースバイケースで、これまでの実績では沈殿化が行われたのが全体の三割ほどだ。これは強制的なものではなく、本人の意思決定が尊重される。虐待の深刻な事例では、子供を虐待した親もまたかつては被虐待児だったことが多く、そういうケースでは記憶沈殿化が有効なのだ。

マザー法の理念では、ひとたび「虐待」という状態に陥ってしまった機能不全家庭は、個々の構成員の保護・教育・更生が果たされた後も、再構成されるべきではない。リセットされるべきだ。その第一段階として、記憶沈殿化措置がとられる。これによって被虐待児の愛着障害を解消し、虐待親の子に対する支配欲・依存を断ち切るのだ。虐待親から切り離された被虐待児は、マザーの子として適切な養家庭に託され、教育プログラムを終えた親は市民社会に復帰する。その後の結婚や、新たに子供をもうけることにも、その養育にも制限はない。

また、マザー法が規定する「子供」はイコール未成年者なので、コミュニケーション障害で就学や就労に困難を覚えている十代の若者もその保護の傘のもとに入る。だから、記憶沈殿化措置と教育プログラムは、社会的ひきこもりの解消や、未成年者の犯罪や家庭内暴力の対策にもつながる。親から精神的虐待を受けたティーンも、「子育てに失敗してしまった」と悩むその親も、マザー法のおかげで人生をやり直すことができるのだ。

実際に、マザー法施行以来、若年層による犯罪は着実に減り続けている。我が国の殺人事件の六割近くを占めていた「親族内殺人」の件数も減少の一途にある。

少子高齢化・人口減少社会のなかで、親に殺される子供も、子供に殺される親もなくすること。子供たちの「親を選べない」という絶対的な不公平を緩和し、大人たちが「親になることに失敗したとき」のセーフティ・ネットとなるシステムを設け、全ての国民に「生きがいのある人生」をつかむ機会を与えること。その理想を達成し得る、マザー法はまさに奇跡の法律だ。

でも、救いきれないものはある。

それから数日間、わたしは一人で迷い、悩み、怒りを噛み殺した。

怒りは明快で真っ直ぐだった。アンザイという女への怒りと、アンザイに投げつけられた言葉への怒り。あのカードを拾って持ち帰ってきてしまった自分への怒り。破って捨ててしまうことができない、わたし自身への怒り。迷いと悩みは、その怒りをどう整理したらいいかわからなかったからだ。

ネット検索してみたら、カケイサユリの素性は簡単にわかった。掛井さゆり、現在三十五歳。確かに確定死刑囚で、半年前に二度目の再審請求が棄却されていた。この請求は二度とも「被告人は事実誤認により不当に重い刑を科せられている」と訴えたもので、冤罪を主張しているのではない。新しい証拠が認定されたわけでもない。

だから、請求棄却はきわめてまっとうな判断だ。掛井さゆりは、もういつ死刑が執行されてもおかしくない状態なのだった。

わたしが鬱々^{うつうつ}としてしていることに、一美が気づかないわけはなかった。

「どうかしたの？」

「何でもない。ちょっと風邪^{かぜ}気味なだけ」

そんなやりとりではごまかし切れず、結局わたしは白旗を掲げて、一美に全てを打ち明けた。件のカード^{くだん}も見せた。

かなり長いこと、一美は無言だった。夕食後、人気がなくなつて、天井の照明も半分ほど消されたカフェテリアの片隅。プラスチックに残る温い^{ぬる}コーヒ。

カードの角^{かど}を指でいじりながら、一美は低い声で言った。

「この団体のことなら、あたしも知ってる」

このカードには、記憶沈殿化措置を受けたマザーの子供たちが過去を取り戻すことを推奨し、必要な申請を無償で請け負うと喧伝している法律家の団体の連絡先が印刷されていた。電話番号とメールアドレス。

「一時は駅前や学校の前でもおおっぴらに配っていたもの。逮捕者が出てから、ちょっとなりをひそめていたけど」

カードをテーブルに置き、一美はわたしを見た。「ここに連絡してみる？」

「まさか！」

わたしは強く首を振った。

「それじゃ、このカードを所長に提出して、アンザイという女のことを相談してみる？」

わたしは目を睜みはった。

「一美、本気で言ってるの？ そんなことをしたら、三好さんに迷惑がかかっちゃうよ」
アンザイは、わたしに接触してきて実母の情報を漏らし、元委員会スタッフとしての守秘義務違反を犯した。それだけでも重大な違法行為だ。加えて、このカードを押しつけてきたことはマザー法に保護されている養子や養家庭に対する嫌がらせや妨害行為とみなされ、破壊活動防止法にも抵触する（反対派はこの法解釈が憲法違反だと訴えて争っているけれど、今のところ最高裁判所はマザー委員会の味方だ）。

もしもわたしが通報したら、捜査はアンザイ夫婦だけでなく、彼らと付き合いがあり、結果的にわたしをアンザイに近づけてしまった三好家の人びとにも及ぶだろう。

「わかってる」と、一美は声をひそめた。「それはあたしも心配よ。マザー委員会の特別捜査官に探り回られたら、ミヨシのご両親が、あたしたちの養家庭が解体されてしまったことを気の毒がってくれたことも、悪い方に解釈されかねないからね」

そこまでは考えていなかったから、わたしは絶句してしまった。

「……それ、すごく危険だよね」

「うん」

わたしはカードをつまんで、手の中でくしゃくしゃに握りしめた。

「これ捨てる。焼いちゃった方がいいかな」

「だったら、なぜ持って帰ってきたの？」

問いかけて、わたしが答える前に、一美は素早くかぶりを振った。「ううん、捨ったことはないの。こんなものをミヨシの家の近くに残しておいたらまずかったもの。でも、とっておいたのは、二葉に何か考えがあったからじゃないの」

わたしたちは見つめ合った。

「二葉、掛井さゆりに会いたい？」

カードを握りしめた手を膝の上におろして、わたしは一美の顔から目をそらした。

「興味がわいたのは確かよ。犯罪者で、しかも死刑囚だなんてね」

「ただ、会いたいわけじゃない。」

「腹が立ったの。頭がおかしくなりそうなほど腹が立って、悔しくて悔しくてたまらなかったの」

アンザイというあの女が、「あなたの生みの母親が会いたがっている」と言ったからだ。「何でそんなことを言い切れるのよ。おめでたいったらありゃしない」

声が大きくなってしまったので、わたしはいったん呼吸を整えた。

「そんなの、典型的な反対派の偽善者どもの考え方じゃない」

生みの親の愛は絶対だなんて。

「——アンザイ夫婦は、活動家にかぶれているのかもしれないわね」と、一美は言う。

「お金持ちっぽかったでしょう。過激な反対派には富裕層が多いのよ」

苦労してないから、母性や血の絆きずなの絶対性を信じている。とうの昔に否定されてしまっ

た神話を捨てられないのだ。

「すぐく悔しかったから、アンザイがほざいたことが本当なのか、本人に確かめたいって思っただけ」

掛井さゆりに会って、訊いてみたい。あんた、ホントにあたしのこと覚えてた？ 処刑される前にあたしに会いたいのは、おなかを痛めて産んだ実の娘だから？

「マジでそう思ってるっていうなら、おあいにくさまでしたって笑ってやりたい」

わたしの母親は咲子ママだけ。あんたのことなんか知らない、と。

「それだけのことよ」

わたしは一美に頭を下げた。

「心配かけちゃってごめんなさい」

一美の表情が歪ゆがんだ。こらえきれない痛みと悲しみ。

「——どうしてあんたがこんな想いをしなくちゃならないんだらう。代わってあげたい」

胸が熱くなつた。わたしの姉さん。ホントの家族がここにいる。

「掛井さゆりのこと、調べてみたの？」

「うん。検索だけで、何をやらかして死刑になったのかはわかったよ。もちろん、あたしとの関係とか、あたしに何をしたのかはわからないけどね」

マザー法で保護されると、保護の原因となった事由は非公開になる。記録は封印され、当事者であっても、委員会に申請し、面倒くさい手続きと審議を経て許可を得ないと、そ

の情報に触れることはできない。

「この人、今三十五歳なんだから、あたしを産んだときは十代だよ。で、マザー委員会に保護されて教育を受けて社会復帰したんでしょくに、最初に逮捕されたのは二十二歳のとき」

違法薬物の所持と売買の罪に問われ、このときは執行猶予がついている。

「そのあと結婚して離婚して、二十六歳で既婚者と不倫して、別れ話で揉めた挙げ句に、相手の家に押しかけていって、奥さんと子供を刺し殺しちゃったの。それで一審で死刑判決、高裁でも死刑、最高裁で死刑が確定」

支援団体と弁護士がついていて、その後の二度の再審請求では、「被告人が犯行時に心神耗弱状態にあったことが考慮されていない」「謀殺と認定されているが、殺害行為は偶発的なもので、傷害致死に該当する」と主張したけれど、これはナンセンスそのものだ。だって掛井さゆりは、不倫相手の家に押しかけるとき、バッグのなかにナイフを二本も隠し持っていて、それを犯行に使っているのだから。殺害後は遺体をガレージに移して車用のカバーで覆い、すぐには発覚しないよう犯行現場のリビングを掃除した上で、被害者の衣類やアクセサリーを物色してから立ち去っている。このどこが「偶発的」なものか。子供だって鼻で笑う。

「ろくでもない女よ。人間のクズ」

わたしは言って、こみ上げてきた嫌悪感を、冷めてしまったコーヒーで飲み下した。

「マザーの教育プログラムも、カウンセリングも職業訓練も就労支援も、みんな無駄だったわけね」と、一美が呟く。「人格障害なのかもしれないね」

「さあね。あたしには関係ないから」

重篤な遺伝病の可能性があり、早急に遺伝子治療を施す必要がある場合を除いては、生物学的な親子関係に大きな意味などない。それはマザー法以前の社会に垂れ流されてきた盲信に過ぎない。わたしという人間を左右するのは、「誰に産み落とされたか」ではなく、「誰にどんな環境で養育されたか」だ。

カフェテリアのスタッフが出入口からちらっと顔をのぞかせ、わたしたちがいるのを見て、にっこりした。わたしも一美も笑顔で会釈を返し、スタッフは立ち去った。

「全部、嘘かもしれないよ」

愛想笑いを消し、能面のような顔になって、一美は言った。

「アンザイはあんたを騙したのかも知らない。名前も顔も覚えてるなんて、でまかせで」マザーの子なら誰でもいい。死刑囚の掛井さゆりと結びつけて動揺させ、マザー法に反対する活動家と接触させられるなら、嘘も方便だ、と。

その可能性なら、わたしも考えた。三好家で遭遇したのは、あまりにも出来すぎた偶然に過ぎる。

でも――

わたしはスマートフォンを取り出して操作し、目的の画像を表示した。そして黙ったま

ま、一美にそれを見せた。

三年ほど前、二度目の再審請求を行う際に、弁護団が公開した掛井さゆりの写真。今は弁護団のサイト上にアップされている。

年齢差を考えても、わたしとよく似ていた。輪郭、生え際の感じ、目元と鼻筋。生き写しといってもいい。

わたしの怒りも、それが制御も整理もつかないのも、この写真のせいだ。一美がみるみる青ざめてゆくのを見守りながら、わたしはほとんど苦痛に近い怒りに固まってゆく。

他のことは何とでもなる。でもこれだけは我慢ならない。アンザイの言葉を思い出すと、身体の奥が焦げてしまいそうなほど悔しい。

——面影がそのままのもの。本当にそっくりそのまま。

「あたしたちは咲子ママに似てるのよ」

絞り出すように言って、一美はスマートフォンを伏せてしまった。

「こんなの気にすることない！」

「わかってる」

憲一パパと咲子ママとわたしたちは、人生を共有してきたから、互いの心が似た。それが外見にも影響した。わたしたちこそが真実の家族だ。理想型だ。

いまいましい遺伝子の仕業なんかには、わたしは動揺しない。

なのに、怒りがわいてくるのが悔しい。